

One Small Step, A Giant Leap
創造と希望に満ちた未来への飛躍
～勇気と可能性に富む青年経済人の挑戦～

■飛躍の先にある私たちの未来

現代社会は閉塞感に苛まれ、私たちが送る日常生活は数多くの不安に曝されています。かつて私たちが少年少女だった時代は、未来への夢に溢れていました。きっと未来は素晴らしいものになるはずだと、子どもだけではなく大人ですら信じて疑うことはありませんでした。しかしながら、新世紀となって10年が過ぎた今でも、依然として旧世紀での目覚ましい経済成長という栄光の影を追い続けることにしか価値を見出すことができないまま、現在の私たちは漫然と日々の生活に追われているのが現実です。人心が荒廃し、未来への展望すら拓けない毎日には、失望することしかできないのでしょうか。新しい時代を開拓するフロンティアスピリットは、社会から永遠に失われたのではないかと不安を覚えます。しかし、私たちは既に気づいているはずです。私たちが求めてやまない明るい豊かな社会は、過去の延長線上で保証されていたものではなく、自らの手で新たに創ろうとしなければ、永遠に現れないということ。近づこうとするほどに遠のいてゆく砂漠のオアシスの如く、ひたすら現実に追いつくだけでは、私たちの望む未来はやってきません。

現在の社会での行動の帰結として現れる未来の社会を受け継ぐ世代であるだけではなく、来るべき時代を先頭に立って率いる役割を担うのは、社会の指導者となる使命を負う私たち青年経済人において他にありません。私たちが望む未来を手中に収めるためには、今やらなければならないことを見極め、断固とした決意で実現に向けた運動を展開することが急務なのです。未来は、無批判に過去を受け継ぐことではなく、新しい創造や希望を現実にしようとするところから生まれてくるのです。過去の実績と現在の期待が調和し融合して、そこに自由で豊かな発想が加われば、私たちの眼前には自然と新しい社会の姿が拓けてくるはずです。未来を目指す新たな志が次々と生まれてくる土壌を整えるためには、市民の行動を変えること、私たちが率先して創造と希望を具体化して社会に示すこと、そして私たちが継続的に社会と共に成長して運動をさらに広めることが欠かせません。私たちが暮らす新潟を、創造と希望に満ちた未来が現実となる社会の先駆けとするべく、勇気と可能性を携えて時代の停滞を打破して、私たちは未来を生み出すための飛躍に挑んでいくのです。

■行動の変化が未来への道を拓く

社会は、そこに暮らす住民があつてこそ成立し、住民の希望や意思が直接間接にその方向性を決めています。社会を正しい方向に進めるためには、私たちの行動を正さなければならず、行動が変わらないのに仕組みやルールだけを頭ごなしに変えたとしても、それら

が定着して社会の方向性が変わることはないでしょう。行動を変えるには、行動を支配している意識、つまり行動の基準を変えていくことが先決です。周囲に対して関心を持って他者を理解しようとすることは、失われた価値観や人間関係に基づいた社会の意義を改めて確認し、周囲との共生を果たすことです。私たちは、新潟を足がかりにして、そのために必要な考え方を新たな行動基準として確立し、社会全体の行動を変化に導かなければなりません。

かつては稀であった無差別殺人、子どもへの虐待、社会的弱者を狙った詐欺といった非道な犯罪の発生件数は、近年、増加の一途を辿っています。先人の時代に比べれば、私たちは物質的には遙かに豊かな社会に暮らしており、発展の果実を存分に享受して幸せな生活を送っているはずでしたが、現実には凶悪化・悪質化している犯罪に脅かされ、かつてよりも日常における不安は増大しています。「相手は誰でも良かった」「自分さえよければ良い」として犯罪に手を染める者は、「他人の痛みを理解する」「自分がされて嫌なことは、他人にしてはならない」という周囲への共感力が絶望的に欠如しているに違いありません。また、人間関係が形骸化して周囲との関係性が疎遠になったことで、他人に迷惑をかけることへの抵抗感が薄くなり、分別のない軽率な行動を自制してきた忍耐力や克己心が欠如したことが「キレル若者」のように短絡的で過激な行動に人を走らせているのです。社会生活のあらゆる局面で、自分勝手な都合で曲解された個人主義の拡大を許していけば、いずれは人間社会の崩壊を招くことでしょう。個人レベルでの人心の荒廃が社会問題の一因である以上、自分さえ良ければというエゴイズムや行き過ぎた権利意識を戒め、他人への共感力や自己を律する忍耐力を涵養し、周囲への情に満ちた「真^{まこと}のこころ」を育成することが、ひいては私たちの生活を守り、社会の基盤を固めることになるのです。

近年のライフスタイルの変化に伴って、個人と行政単位との橋渡しであった地域コミュニティの機能は弱体化しつつあります。近所付き合いや町内会の活動は、ともすれば人間関係が複雑であったり参加のために割く時間が負担になったりして、敬遠される傾向にあります。そして、生活様式の多様化に伴う行動時間のズレや就学・転勤等によって地域への定着機会が減少していることに加えて、行き過ぎたプライバシー意識が台頭していることで、隣近所に関心を持たずお互いの顔も知らないのが当たり前と考える住民が増えているのです。その結果、登下校時の児童の安全は、保護者組織による自主警備や警察等へのアウトソースに頼るようになり、かつては尊敬される存在であった高齢者の安否や所在に地域の誰もが関心を持たなくなってきたのです。近隣との関係の希薄化は、助け合いや仲間意識を損ない、元来地域コミュニティが果たしてきた役割の代替を次第に行政や外部のNPO等に求めるようになっていきます。地域での自治は民主主義の最小単位とも言え、その地域の住民が地域の問題を自らの問題と捉えてコミュニティの力で解決しようとしなくなれば、早晚、市民全体が社会の問題を自らの問題と捉えて真剣に立ち向かっていくことも望めなくなるでしょう。地域コミュニティの落日は、社会からの問題解決能力の喪失につながり、いずれ私たちの生活を脅かす病根となる危険を秘めているのです。新潟

県内で近年発生した震災の被災地における住民同士の助け合いは、都市圏から来たボランティアに感動すら与えました。もし地域コミュニティが滅びてしまったら、災害等の非常時への対応能力は致命的に損なわれることになるでしょう。地域コミュニティが果たしてきた社会的意義を再認識し、助け合いや密接な人間関係の大切さを正当に評価し、住民が価値を認める地域コミュニティの復権を目指して社会に働きかけることが、社会機能の衰退に歯止めをかける一助となるはずです。

文明の拡大に伴って自然環境も激変を余儀なくされています。一方で、生命体は常に自然への憧憬を抱くものであり、私たち自身も、時には文明社会から逃れて雄大な自然に接することで、心身をリフレッシュし明日への活力を取り戻しているのです。素晴らしい自然を擁する地球と共生することなくして、文明社会の発展は成し遂げられなかったでしょう。私たちの世界が地球上にしか存在していない以上、地球環境が滅びて、人間が生き延びることなど考えられないのです。ところが、現実の文明社会は、環境を変え資源を浪費するなど自然を極限まで酷使しており、地球の持続可能性を急速に奪いつつあります。近年になって、気候変動や資源枯渇への危機感から環境意識が高まった結果、日常生活でも「エコ」を重視するようになってきました。しかし、私たちは単に流行に踊らされ、義務的に環境を気遣うよう振舞っているだけかもしれません。燃費の良いエコカーを選ぶことが公共交通機関や徒歩での移動手段に切り替えないことの免罪符となり、ゴミの分別に熱心に取り組めば大量消費型ライフスタイルが正当化されると信じるようにすらなっています。私たちの環境意識は、あくまでも現在の生活レベルを前提としており、文明社会の許容範囲を侵す限界まで深まるには至っていないのです。現在の地球の姿は、46億年という途方もない時間をかけて育まれてきました。私たち人類は、ほんの100年程度で、その果実を我がもの顔で食い尽くそうとしています。「人間は、地球を蝕むウイルスである」と揶揄できるように、自然が創り上げてきた環境や生態系は、人類の都合だけで変えるべきものではありません。遊魚の末に放流されたブラックバスやブルーギルといった凶暴な外来魚は、悠久の自然淘汰を生き残った我が国の在来種を易々と駆逐しています。仮に人体には安全とされたとしても、遺伝子組換作物が生態系に与える影響まで計り知ることはいけません。人類は、地球環境を操り、生物の進化を司るほど傲慢になってしまったのです。独善的に人間の営みだけを考えることなく、環境という周囲への畏敬の念や共感を育み、自然と文明社会が共存共栄する環境問題への取組の新しい道を示すことで、地球と人類の共生が実現するのです。

■新潟の未来は私たちの創造力に懸かっている

逼迫する財政、進展する地方分権の中で、地域の住民や自治体は、自らの行く末を自らで定めて結果責任まで負うことを強く求められるようになってきました。地域の政治・行政・住民は、夢のあるまちづくりを志向しつつも、時勢に振り回され、時には目的を見失って迷走しているようにも見えます。しかし、回り道をしている余裕は最早ありません。

私たちは、青年経済人という立場で大局的な見地から地域経済や都市政策を論じることを通じて、目指すべき明日の新潟の姿を創造し、果敢に社会に示していかなければならないのです。

現下の地域経済の疲弊は、世界規模で進む経済のグローバル化が全国一律に波及したことで、地域社会と共生して発展してきた従前の地域経済の仕組みが機能不全を起こしていることが一因であると考えます。政令指定都市となり発展しているかに見える新潟市も決して例外ではありません。地域の経済は低迷し、多くの地元企業の体力は刻々と削られ、昨日の友が今日の敵となり、さながらお互いの企業体力を賭けた我慢比べの様相を呈しつつあります。大型店の進出が呼び水となって進む価格破壊は個々の消費者には歓迎されているものの、地元商店街が寂れてまちの活力が失われるなど、結果的には地域全体の購買力や成長余力の減少を招き、大都市圏の住民との生活水準の格差は開く一方です。雇用や税収を支える大型店や工場の進出に一喜一憂した上に、ひとたび撤退されて被るダメージは現在の地域経済の力では容易に回復できなくなっています。行政分野では地方分権が進んでいる反面、自由主義経済下での巨大資本は一層中央集権化し、地域の自立の機会を奪い、我が国の地方での経済活動を牛耳りつつあります。新潟に限ったことではありませんが、今までの地域経済の内情としては、企業が安定にあぐらをかいて努力しなかったり、官民が談合を通じて生き残ってきたりと、多くの構造的な問題が指摘されることでしょう。だからといって、経済効率・機会均等を追求するグローバリズムが、地域経済の発展に寄与しているとも思えません。これからは各地に固有の経済の仕組みを尊重しつつ、地域と共生できる新しい経済の方法論を見出さなければなりません。そのためには、グローバリズムに相對する概念として従来の地域経済の仕組みをローカリズムと位置付け、それらの功罪を含めて評価した上で、グローバリズムとローカリズムの調和を目指すべきです。そして、私たちの暮らす新潟でも、実情に即した経済の仕組みに裏付けられた新しい地域の姿を確立することが必要なのです。

少子化・高齢化を背景とした人口減少社会の下、中心市街地を核とした交通網で地域をネットワーク化するコンパクトシティ構想が提唱され、隣県の富山市は成功事例のひとつとして名を馳せました。富山ライトレールがLRT(軽量軌道輸送機関)の代名詞となり、都市政策の象徴となっているように、都市には利便性の高い公共交通機関の整備が不可欠です。都市化が進んでいる以上、通学・通勤や公共サービス等の都市生活の要素の多くは、住民が広範囲に移動することを当然の条件として整えざるを得ないのです。そのために多くの政令指定都市では地下鉄のような軌道系の公共交通機関が核となる都市交通が整備されている一方で、合併によって市域が格段に拡がり、今や80万人余りの市民を抱える新潟市では、依然として自動車・バス等の利用を前提とした都市設計のままとなっています。合併した市域を含めた新潟市としての一体性を高め、都市機能を活性化するためにも、今後は交通政策のパラダイムシフト(価値基準の転換)が求められることでしょう。近年になって、中心市街地の活性化や新潟空港へのアクセス向上の観点から、バスの利用促進が

図られ、LRTやモノレールといった新しい公共交通機関の整備に係る検討も活発化していますが、必ずしもまちづくりの全体像との関連性までは明らかにはなっていません。政令指定都市の中でも比較的広い面積を有する新潟市にとって、こういった公共交通機関を選択して都市でのモビリティ（移動性）を向上していくのかは、中心市街地だけに限られない都市全体のデザインと密接に関係しており、新潟のまちづくりの進め方と両輪となって検討すべき課題なのです。私たちは、現在の議論を総括しつつ理想的な公共交通体系を見出すことを通じて、新潟のまちづくりの可能性を拡げる方策を探らなければなりません。

■未来の原点は郷土への愛着と理解にあり

狭い国土に1億2千万人に及ぶ民が暮らす我が国では、島国という地形的な制約等を背景として、古来より地域に根差した固有の歴史が連綿と受け継がれ、各地において素晴らしい文化や風習が現代に至るまで育まれてきました。そして、そうした文化や風習を活用することで、各地で経済の成長や観光の振興が実現してきたのです。しかし、情報化社会の進展と高速交通網の発達により国土全体の均質化が進んでいる現代社会では、まちづくりで地域の特色を打ち出していくことは徐々に難しくなっています。さりとて、日本経済全体が低成長に苦しんでいる中で、こうした変化に甘んじて地域の特色の発掘と深耕を放棄して、将来に向けた地域の発展の可能性を拡げることを諦めてしまえば、いずれ日本全国各地に崩壊の危機が訪れることでしょう。地域の発展の足がかりとしてのまちの特色・まちの実力を知ることなくして、地に足のついた創造は生まれてこないのです。そのために私たちは、郷土新潟の真価を常に追い求めていかなければならないのです。

本州日本海側最大の都市となった新潟は、歴史に培われた文化や風習が息づき、住民には自主・自立の気風が受け継がれてきた特色のある都市です。交易が盛んなみなとまち、華やかな柳都、天領としての自由な気風といったまちの個性が、常に新潟の発展を後押ししてきました。14市町村の合併を経て8つの行政区を擁するまでに成長した新潟市には、時代を越えて受け継がれてきた多くの郷土の貴重な伝統があり、住民である私たちの価値観の形成にも多大な影響を与えてきました。しかし、細々と保存活動が行われているもの以外の多くの伝統は、その価値が広く認められない限りは遅かれ早かれ永遠に失われてしまうことでしょう。こうした有形・無形の郷土の伝統への認識を深め、その独自性や優位性を理解することによって、新潟の潜在的な成長余力を見極めることができるのです。安易に他地域の真似ごとになるのではなく、新潟の固有の価値を尊重し、活用することこそが将来のまちの発展の基盤となるのです。その認識を広く市民と共有するためには、市民とともに郷土の伝統に親しむことに加えて、私たちが率先して次代に承継し、再生し、創造する取組に参画することが必要です。価値ある郷土の伝統の活用を促し、新しい地域の財産に昇華させることが、他の都市との差別化に繋がる特徴ある新潟らしさの探究の成果となるのです。私たちは、そうした郷土の力を、新潟の個性的なまちづくりの足場として

活用していくのです。

新潟には、国際都市として海外との取引に取り組んできた歴史があり、現在でも環日本海経済圏に属する国々との空路・航路が整備され、活発な経済活動が交わされています。ロシア連邦総領事館と大韓民国総領事館に加えて、昨年には中華人民共和国総領事館も開設され、環日本海経済圏における新潟のゲートウェイ機能が一層向上することが期待されています。貿易や金融を通じて世界経済が一層連携を深めている現在、一国・一地域の経済が単独で成立することはなくなり、地域経済においても国際的な経済活動との相互関係を無視することはできなくなっています。近年、急速に経済成長した環日本海経済圏において新潟の存在感を高めることは、将来の経済発展の可能性を拓けることとなります。こうした状況を踏まえれば、新潟と対岸地域との取引や経済活動の実態を把握し、国際経済における新潟の位置づけを正しく理解することは、新潟の経済の行く末を見通す上で避けて通れません。また、国際交流都市である新潟の市民として、海外との交流を通じて外国人と親しむ能力を養うことも肝要です。外国人との相互理解がなくては固い信頼関係を築くこともできず、国際経済の舞台での新潟の持続的な発展は適わないことでしょう。共通の理念に導かれて世界平和を目指す国際組織である青年会議所は、環日本海経済圏のみならず世界に広がるネットワークを有しており、民間外交における国際感覚を養う貴重な機会を与えてくれています。民間国際交流の一環として、姉妹締結している大韓民国ソウル汝矣島青年会議所並びに中華民国板橋国際青年商會と国境を越えた友情を育み、一層の強固な関係の構築に努めます。

■発信と普及がなければ私たちの運動は完成しない

青年会議所運動は、常に地域とともに歩んできました。私たちの運動の多くは、事業単体の精度を上げるだけで完結するのではなく、地域に広く波及して実を結ぶものです。間接的に私たちの運動に接する市民を増やすことと、直接私たちの運動に携わる同志のすそ野を広げることが相まって、運動の完成度が高まるのです。私たちは、自らの運動の発信と普及を通じて、地域との対話による密接な関係の構築を促進し、青年会議所運動の地域への浸透を実現するのです。

事業の目的達成の支援のため、インターネットや各種媒体等の情報提供手段を活用して運動の広報並びに成果の発信を行い、私たちの運動の意義や実績への理解と共感を地域に広めていきます。同時に、市民との距離を縮めて私たちの運動への親近感を生み出すためには、主観的で一方的な発信に止まらず、地域との対話の機会を増やして客観的な評価を求めていくことも、効果的に運動を広めるためには必要になるでしょう。また、新潟市民は元来謙虚でPR下手とされて地域の良さを十分に発信できていないと指摘される反面、適切に情報を発信しさえすれば、一気に新潟の魅力が顕在化する可能性を秘めていると考え、JCが主体となって地域の発信力の補完に取り組みます。商店街の活性化といった地域振興やB級グルメ・観光スポット開拓といった新潟の潜在力の発揮のためには、現状の

情報発信の問題点を検証した上で有効な対策を見定め、様々な情報発信手段を駆使したアピールを進め、情報の持つ力を直接まちづくり・まちおこしの実践に繋げていくのです。

新潟JCは1000名に及ぶシニアメンバー・現役メンバーに支えられ、57年の長きに亘って郷土新潟と共に成長してきた歴史の裏付もあって、地域に貢献する団体としての高い社会的評価を得るに至っています。40歳で卒業する青年会議所のルールに鑑みれば、次世代・次々世代を担う新たなJAYCEEを育てていくことも、私たちの運動が継続的に地域に受け入れられる前提となるでしょう。また、今後さらに広く運動を展開していくためには、運動に参画する会員の絶対数の確保も大切です。新潟の将来を担うことが期待される新入会員の獲得に意欲的に取り組み、新入会員を私たちの同志として迎え、地域を支える青年経済人としてふさわしい素養を育てることなくして、青年会議所運動そして地域の将来はありません。青年会議所運動の担い手の拡大を、運動の継続と拡大を可能せしめる将来への基盤整備とすることに加えて、私たちに共感する市民を会員として受け入れることが運動の伝播に繋がる手法であるとも位置付け、LOMを支える質・量を兼ね備えた新入会員の確保・育成を目指します。

■青年経済人が資質を高めることが地域の未来の可能性を拓ける

私たちが取り組んでいる青年会議所運動には、二つの目標が内在しています。ひとつは、メンバーの活動が直接的に社会に変化を促すということであり、もうひとつは、活動を通じてメンバーが成長することで地域に貢献する人材を生み出すということです。運動の効果を最大化するため、私たちは、真剣に事業に取り組むことと同時に、個々のメンバーが有する潜在力を十分に引き出すことを通じて組織の真の力を結集し、将来の新潟の可能性を拓げるべく、個と組織の力の向上に努めなければなりません。

価値観が多様化して従来の手法が必ずしも正解とされなくなった現代では、企業や社会、政治の世界でのリーダー不在が続いています。そんな状況だからこそ、社会を変える運動に己を捧げてきた青年会議所メンバーに、企業や社会のリーダーとしての期待が集まっているのです。リーダーは、一朝一夕で生まれはしませんし、うわべだけのリーダーシップ論を習得するだけでなれるものでもありません。青年会議所運動に身を投じること自体がメンバーのリーダーシップを開拓する格好の場であることは言うまでもありませんが、加えてリーダーシップの開拓に特化した活動を展開することで、実地体験だけでは得ることが難しいような系統的かつ網羅的なリーダーシップの習得に勢いがつくことでしょう。実社会で活躍する数多くのリーダーの実績や経験に積極的に触れ、自らの見識を高める道を拓くことで、私たちのリーダーシップがより強固なものに育っていくのです。

私たちは、青年会議所運動が社会貢献の一環であると信じて、日々の精力的な活動に邁進しています。その信念に迷いが生じて確信が揺らいでしまつては、力強い運動の展開はできません。そのためには、LOMの構成員が強い信頼で結び付けられ、同一の目的を確実に共有していることが必要になるのです。メンバー同士の固い友情に支えられて、LO

M全体が一致団結して運動に取り組めば、運動の成果は倍加されることでしょう。そのためには、お互いに対する尊敬を確かめ、様々な局面で活躍している同志を尊重することに加えて、自らが得てきた知識や経験を積極的に分かち合うことも大切です。また、他の団体には見られないような強固な信頼関係と共通の認識に支えられ、長きに亘って地域に根差すシニアメンバー並びに現役メンバーが協調して紡いできた大きな人的ネットワークは、今後もJ Cの枠を超えた新たな社会貢献や経済活動の源泉となる可能性を秘めています。より強固な会員ネットワークの開発を旨として、メンバー間の交流を深めて組織の一体感の醸成を進めることが即ち、結果的に地域の発展を後押しすることに繋がるのです。

■組織基盤の強化、そして次代への展望を拓く

国内でも有数の規模を誇る新潟J Cは、慣習や人間関係に頼るだけでは運営できない組織に成長しており、明確で堅固な仕組みやルールを設けることなくしては安定的かつ円滑な運営を維持することは難しくなっています。地域でも職場でも他人と関わる活動をする際には、必ず組織運営という課題が生じてくるはずです。私たちは、運動を通じて社会に関わっていく前提として、社会の範となる組織運営に努めなければならないのです。さらに、私たちの運動が所期の成果を挙げていくためには、何時如何なる時でも組織の意思決定をタイムリーかつ適切に下せるようにしなければなりません。そのためには、効率的な組織体制の整備と運用を心掛け、属人的な知識や経験だけに頼らない中立で公平な運営を旨としなければなりません。

また、適切なLOM運営の確保に必須となるのが、財政規律の維持や著作権法等の各種法制度の遵守です。公に裏付けられた活動のためにメンバーが拠出した貴重な財源に支えられて活動している以上は、LOMにおける不適切な会計処理や権利の侵害、権限の濫用は絶対に許されません。さらに、2013年末に期限が迫った公益法人制度改革への対応にも取り掛からなければなりません。まずは、地域社会が私たち青年経済人に期待している役割や、LOMのメンバーが新潟J Cに期待している機能を明確にし、その上で、私たちが考える理想の組織の姿が現行の組織制度とどこまで適合するのかを具体的に検証し、可能な限り新潟J Cの本質を損なうことのないようにしつつ、私たちの組織に望ましい現実的な組織形態を明らかにしていきます。それと同時に、組織形態の変更に伴って必要となる諸手続への対応の準備を進め、2011年度中には進むべき針路を定めるべく取り組みます。

■私たちが踏み出す一歩が未来を目指す飛躍の原動力となる

1969年にアポロ11号で人類初の月面着陸を敢行したニール・アームストロングは、月面に第一歩を標すに際して

「これは一人の人間にとってはOne Small Stepだが、人類にとっては偉大な飛躍である。」
との言葉を残しています。開拓者精神に溢れて未だ見ぬ未来を拓くべく挑み続け、遂には

夢を現実にしたその飽くなき姿勢は、半世紀を経ても私たちに勇気を与えてくれます。

黙って現状に甘んじているだけでは、現在を変え、未来を拓いていくことはできません。誰かが先頭に立って、未来を目指して社会を率いていかなければならないのです。それこそが、私たち青年経済人に与えられた使命なのです。たった一人では社会を変えることはできないかもしれませんが、高い志を持つ仲間が集う新潟 J C という組織の力を結集して運動に取り組み、きっと市民の負託に応じて社会を動かすことができるはずで、私たちは、この青年会議所運動に未来の新潟を創り出す力を見出しているからこそ、ここに集い共に運動に身を投じているのです。私心なく社会のために力を惜しまない私たちだからこそ、誰からの非難も恐れず、堂々と己の信じる道を歩むことができるのです。たとえ失敗しても、それをリカバリーする機会に恵まれている青年だからこそ、勇気を携え可能性を信じて挑戦し、未来への歩みを始めることができるのです。

私たちの取組は、傍から見れば小さな一歩に見えてしまうかもしれませんが、私たちが強い信念をもって踏み出せば、その一歩は必ずや社会に大きな波紋を駆け、未来への飛躍に繋がるに違いないのです。だから、私たちは踏み出すこと、挑戦することに、躊躇してはならないのです。今こそ、私たちの暮らすまち新潟を、創造と希望に満ちた未来の社会にするために、飛躍を志して進取果敢に運動に取り組まなければなりません。自らの選択に信念を持つことができれば、勇気を胸に、可能性を信じて、どんな困難にでも挑むことができるはずで、私たち青年経済人の挑戦が、素晴らしい未来を拓くのだと、私は確信しています。

【事業計画】

- (1) 周囲と共生するための新たな行動基準を確立する運動
- (2) 地域経済や都市政策の創造を通じて将来の新潟の姿を明らかにする運動
- (3) 地域の真価を追求することで将来の新潟の発展の可能性を見出す運動
- (4) J C 運動の普及と拡大による地域との対話を進める運動
- (5) 個と組織の資質の向上を図ることで J C 運動の効果を高める運動
- (6) 組織の運営方法並びに形態を確立して組織力を強化する運動